
ゴースト・オブ・ザ・デッド

継続

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴースト・オブ・ザ・デッド

【Nコード】

N6315E

【作者名】

継続

【あらすじ】

夏ホラー2008〜百物語編〜参加作品。ゾンビに埋め尽くされた街を生き延びていた二人の高校生は、避難所として指定されている廃校にたどり着く。そこにいた数名の生存者とともに脱出を図ろうとするが……。ゾンビと幽霊を組み合わせた作品です。

一話 廃校へ（前書き）

興味をもつていただきありがとうございます。

一話 廃校へ

7月4日。

ニュースで新種ウィルスの世界規模の発生を確認。直後、テレビが電波を受信しなくなり、感染者二名の襲撃を受ける。当時の心境は覚えていない。

7月8日

前日までの記憶がないため、この日から記す。街の喧騒に紛れて避難所を示す放送が聞こえた。何年も前から廃校になっていた高校を一路目指すことにする。

隠れていた同級生の佐藤恵理と遭遇。赤い部屋、とだけ書かれたメモを持っていた。本人いわく「いつ手に入れたか分からない。でも、捨てたらいけない気がする」

7月9日

逃げ込んだ家屋で、妙な感染者（女）と遭遇。後ろを向いて動く気配がなかった。追いかけてきた他の感染者に気を取られ、もう一度見たときにはいなくなっていた。佐藤恵理が震えていたように思う。

7月10日

高校まであと少

「なに書いてるの？」

夏。じりじりと照りつける太陽が容赦ない。

大通りに面した家屋の二階に、佐藤恵理の声が木霊した。質素な小机に向かっていた俺は手を休め、隣にぺたんと座っていた佐藤恵

理を見る。畳の敷かれた六畳ほどのスペースには、俺と彼女のふたりしかない。この家の元の主は、いまは畳と壁にこびりつく血に姿を変えていた。この部屋から血の足跡が玄関まで続いていたため、外出中であるとも言える。

「日記みたいなもんだよ」

俺はどこぞの家から避難させてもらったついでにいただいた、B5サイズのノート掲げる。ありふれたデザインのそれは、おれのポケットに丸められて収納されていたため、ぼろ雑巾としわの数が同じだ。

「見せて」

おれは黙ってノートを彼女に渡し、状況確認の大義のもと、窓の外に目をやる。

大通りというのはもっぱら、自然と人の集まる場所である。であるからして、それは例えば人が人でなくなった時も例外ではなく、そこにはそれらが蠢いているのだ。俺達二人にとっては慣れきった、腐敗臭を纏った動く死者どもが。もちろんそれとは逆に、人通りの少ない路地裏ではちらほらとふらつくやつらがいるだけで、実際のところ、数が少ないとあまり驚異ではない。

形のいい胸をおっぴろげにした女を見つけお得感に浸っていると（ただし腹部から臓器露出）、佐藤恵理が、

「最初のゾンビはどんなやつだったの？」

俺は目を戻し、

「親」

とだけ答えてまた外へ目をやった。

「ごめーふくを」

平坦な声でいう彼女は、口調通りに同情などしていないのがわかる。社交辞令のかけらというやつだろうか。いまだきそんなことを口にするやつも珍しい。そういうのは秩序のある世界にだけ存在するものだ。

「なんで廃校なんだろう。おんぼろだし、わたしたちの学校のがい

いよね。っていうかよく聞こえたね。わたし放送に気付かなかった」
体育座りをして背中を壁に預けた佐藤恵理が、ノートから目を離さず言った。独り言のようなもので、俺は無視した。

しばらく死者どもの大行進を見ていると、俺はあるひとりの人物を見つけた。

「田口だ」

服装が俺達の着ている南高の制服と同じだったため、すぐ分かった。白目で、肩から首にかけての出血が顔をほとんど覆い隠していたが、それでも俺にはわかった。なんせ中学の時から同じクラスだったからね。

「うそ、ほんと！？　おい、田口〜！」

いつの間にか窓から身を乗り出していた佐藤恵理が、腕を前にだしてふらつく田口に手を振っていた。横から彼女の表情を見ると、懐かしさに笑顔は舞っていたが、目は決して、黒くよんだ泥水から変わることはなかった。

「あは、死んでる、ね」

「ああ」

「でも、動いてる」

「見ればわかる」

「……」

その時、玄関のガラスが割れる音がした。あの薄っぺらな引き戸では、やつらの侵入を5秒も阻むことなどできない。そんなことはわかっていた。

「大声だすなよ、馬鹿」

「休憩が終わりってことでいいでしょ」

俺は彼女からノートを受けとり、再びポケットのなかに押し込んだ。続きは廃校に着いてからにしよう。

「屋根伝いに行こう」

俺はそういうと彼女には目もくれず、血で色が変わった金属バットを手にして、さっきまで覗いていた窓から外へ出た。足元には一

メートルほどの幅で、黒い瓦が広がる。

「ね、あの時の女ゾンビのことだけど」

階段から不規則なリズムの足音が迫ってきてても、俺達はそれを気にしない。彼女は俺に続いて屋根の上に降り立った。

「それがなんだ？」

慎重に足を進めながら、俺は廃校までの道のりを思い描いていた。小学生の頃、近道を通るときに毎回見ていたので、なにかで調べるような必要もなかった。ここから路地に降りてしばらくすれば着く。「なんか……普通じゃなかったよね。焦げくさかったような気がしたもん」

「ああ。あと、右腕の肘から先がなかった。でもそこから血は流れていなかった」

彼女があとを続けるように、

「そして、ちよつと目を離したらいなくなっていた」

即席の逃げ道に指定された屋根を何度か曲がるうちに、俺たちは大通りの向い側に着いた。心のなかで田口のご冥福をお祈りすると、屋根から飛び降りる。車一台がやっと通れるほどの狭い路地は、電柱に張り付けてあるデリヘル広告のほかには、両腕のない20代ほどの男の死体が一匹突っ立っているだけの静けさに満ちていた。

「行こうか」

俺達二人はすたすたと、一人すったもんだしている無力なゾンビの横を通り過ぎた。倒れがけに噛みつきこうとしてきた男をひよいとよけた佐藤恵理は、

「ひとつ聞きたいんだけど」

俺が黙って歩くだけなので、彼女はそのまま言葉を続けた。

「記憶がなかったのは、なんで？」

はて、なんでだろう。俺は何度も繰り返した自問自答をもう一度掘り返した。そして、その果てにあった結論だけを、彼女に述べた。「シヨックだったんじゃない？」

俺が他人事のように話すので、彼女は笑った。しかし、これが妥

当な結論だと思う。正常な人間の、正常な反応じゃないか。

「じゃ、記憶のない三日間はどやって過ごしてたの？　よくあいつらに殺されなかったね」

顔がにやけたままの彼女に、これまた俺は、

「泣いてた。それ以外は覚えてない」

結論だけを述べた。

それからしばらくは、誰も話さなかった。いくらかやつらの襲撃を受けたが、まあ、言うほどのものでもない。ただ、汗が止まらなかった。今年の夏を感じさせる風情の蝉の鳴き声は、腐った人間の唸り声にバトンタッチしている。

「ヘリコプターとか飛んでないね」

俺は近いうちに来んだろ、と樂觀した意見を述べると、田園地帯の先に一角を現した廃校を見つめた。

一話 廃校へ（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

ちなみに、この小説とタイトルが同じ映画がありますが、それとはまったく関係がありません。タイトルを変えようかとも思ったのですが、僕は〴〵オブ・ザ・デッド、という響きが大好きなので、このようなタイトルにしました。それでは。

二話 校庭にて（前書き）

うまくまとめられるか不安ですが、がんばって書いていきます。
たぶん、夏ホラーの文字制限の限界（2万文字を）フルに使うと思います。
ううう

二話 校庭にて

錆びついたフェンスは当時と変わらず、静止画のようにくたびれた廃校を取り囲んでいた。立ち入り禁止と赤い文字でなぐり書きされた、くさった食パンのような看板が掲げられているあたり、このフェンスはここが廃校になったあとから設置されたとみていいだろう。目的としては不良集団の侵入を防ぐためだろうと予想はつきやすいが、果たして本当に役に立っているかというところ……。

「壊されてるね。楽で助かった」

押し倒されてねじ曲ったフェンスは、ちょうど二人が同時に通ってもまだ余裕があるほどだった。さらに、役割を果たせなかった無念極まりないフェンスにつたが絡まっていることから、だいぶ前からこの防壁網が綿あめで金魚を救うことほど無意味なものだったとわかる。

「あいつらもないな。しかし、銃を持った迷彩色のおっさん達がいなくていいのはどういことだ」

木造建てのセピアな校舎は、今では珍しくない黒煙をバックに（おそらく学校の向こうの山中から発生している）、とってつけた感じのする狭い校庭を挟んだ先にある。そこにはバリケードめいたものは何もなく、校庭が校庭らしい校庭を演じている。校舎は小規模で三階建てだ。三階と二階がところどころガラスが割れたりしている。一階は正面に昇降口、そしてその他は二階や三階と同じ……？

「……なんで、カーテン全部閉まってんだ？」

一階とその他との違いがそこにあった。日光を通さぬ真っ黒いカーテンが、死臭を纏う風になびいている。しかし、中の様子は窺いしれない。俺は不思議と寒気に襲われた。

あそこに、なにかがいる？

「ねえ。なんかあれやばい気がする……」

佐藤恵理も異変に気づいたようだ。向こうから視線を感じる。殺

風景な上階と、生氣を取り戻したような一階との対比が、俺の危機感知能力を刺激する。しかし俺は、

「大丈夫だ。生存者がいるんだろ」

他に行くあてもない。ただそれだけの理由で、前に進むことを決めた。佐藤恵理は特に反対する意思を見せなかったが、珍しくおびえているようだった。

「待つてるか？」

彼女は首を横に振った。そして、その左手がなにかを求めるようにおれの方に差しのばされた。俺は黙ってそれを握り返す。とても温かった。俺たちは雑草を踏みしめ、どうも様子のおかしい廃校の校庭へ入っていった。

校庭の中ほどまで進んだ時、彼女の手の抵抗が激しくなった。フー、フー、と蛇の鳴き声じみたものも出し始め、俺が無理やり引っ張っているような錯覚に陥ったので、振り向きざまに言った。

「おい、お前やっぱり待って——」

おい、お前やっぱり待ってる。そう、言うはずだった。しかし、俺が振り向きざまに見たのは佐藤恵理ではなかった。俺の手を握っている皮膚のただれた左手は、どう考えても彼女のきめ細やかな色白の肌を連想させない。先ほどまでであったはずの温もりもほとんど感じない。ただ冷たいだけだった。そして、もう一方の腕を見ると——肘から先が無い。

俺はぎよつとしてそのまま顔を見上げた。見上げる過程で、血に汚れた白色の服が見えた。が、そんなことはどうでもいい。佐藤恵理は南高の紺色のブレザーとスカートを着ているのだ。こいつは一体——

「ユウ……あんた、誰引っ張ってんの？」

俺の名前を呼ぶ声がした。謎の人間の背後を見ると、佐藤恵理が

戦慄した表情で立ちすくんでいる。

「あつ……え……？」

俺は、見たくもないのに、その女（と思われる）の悲惨な顔を見てしまった。

ひどい火傷をしている。しかも現在進行形で、赤い網目状の焼き跡が彼女の顔を蝕んでいつている。俺はひどい吐き気に襲われたが、彼女から目を離すことができない。

「……カカ、カ……ダカ……メ……」

口を魚のようにパクパクさせながら、今度はぶつぶつ言い始めた。大きく見開かれた目玉は、苦悶そのものを表しているように感じた。ブルブルと彼女の手が震え始めたので、俺は無意識にそこを見た。

焦げ始めている。

「う、うわっ！」

俺はぐいっと手を引つ張ったが、彼女の本格的に焼け始めた右手は、機械のように動くことがなかった。

そのうち彼女の背中まである髪が燃え、服が燃え、体中を火が覆い始めた。ゼ口距離に感じる熱の波動。俺の右手が真っ赤に燃える。「う、わっ、あつつ」

紅に包まれた彼女はもう人としての原型を留めていなかった。口だったものが、最後にパクパクと、

「カー、テン……だ……メ……」

「うわあああああッッ」

俺が叫ぶと、彼女と、彼女に纏わりついていた炎と、その他歪んだ空気が消え、元のデッドオアアライブな校庭の雰囲気を取り戻した。残されたのは、無傷の右手を握手でもしうかと差し出したままの俺と、口を両手で押えて失神しそうな佐藤恵理だけだった。

「今のつて……あの時の？」

言わずもがな。

「じゃあ……えつ、と。なんなの？」

なにが？

「ゾンビ？」

さあ。

「さあつて。わたし、気づいたらユウに手離されてて、前見たらあんたが知らない女のこと引つ張つてたんだよ？どっちも気付かないなんておかしいよ。大体……」

まあ、待て。おかしいことをあいつから掘り出したらきりが無い。忘れよう。夢だ。

「そんな簡単に……」

精神的におかしくなつてんだろ。状況が状況だ。現実逃避したいという願望から生まれた幻、夢。そのどっちかさ。

「現実逃避したくて、あんな変な女生む？」

……。

「わたし……あれ、幽霊だと思う」

はんつ。馬鹿言うな。そんなのいるわけないだろ。

「だって……それ以外に説明つかない」

「違うっ……」

俺が思いきり叫ぶと、彼女は黙った。戯言に過ぎない。彼女もそう思っているから、簡単に押し黙ったのだ。

「……とにかく行こう。廃校へ」

俺はさっきから抜かしていた腰を持ち上げ、砂を払いながら廃校を見る。黒いカーテンが揺れている。カーテン……？

歩き始めた刹那、俺は佐藤恵理に、

「カーテンには近づくな」

とだけ言った。

二話 校庭にて（後書き）

ありがとうございました

三話 生存者

両脇に広がる揺らめくカーテンは視界から消え、俺たちは開け放たれた昇降口に入った。錆びついた小さな下駄箱が左の隅に置かれているだけの、質素な作りだった。しかし、どこぞの不良どもが残したスプレーによる落書きが随所に散りばめられ、缶などのごみも散乱しているため、少しばかり目を引きつけるだけの効果はあった。夏の暑さにも負けない冷えたアスファルトの床が、コツコツと俺たちの足音を反響させる。やがてそれはギシギシという音に変わった。廊下は木造だ。

「どうする……おい、痛いからもうちよつとゆるめろ」

がちがちに俺に張り付いていた佐藤恵理が、俺の顔を見て、自分の掴んでいる腕を見て、ぱつと手を離れた。そのあと、俺の手を遠慮がちに握った。こんなに震えて、周囲を必要以上に見回す彼女を見るのはあの時以来だ。

「ここ……すぐく、やだ……」

彼女の冷や汗の伝うのを見た後で、俺は考えた。避難所に指定されているはずの、静寂に包まれた廃校。一階からはなんの物音も聞こえず、廊下の窓から差し込む無機質な光が、なによりも俺たちの孤独を知らせていた。誰かいないかと叫んでみようにも、どこも開いていない教室のドアの向こう側に、確かに人ならざるものの気配を感じ、それはやめておいた。

正面には二階へ続く階段があった。俺は彼女を引っ張ってそこを上った。

「誰かいるかもしれない。できるだけ調べよう——」

階段を上がりきって彼女に話しかけた瞬間、俺の左ほおは衝撃を受け、吹っ飛んで後頭部と背中を壁に強打した。

「アッ」

彼女の叫びと、ライフルが俺に照準をつける際に生じた音は同時

だった。ぼやける視界のなかに、迷彩色が霞んでいる……。

目が覚めた瞬間、俺は反射的に起き上がっていた。視界がぼやけたままなので、さして意味はなかった。次いで頭に痛みを感じ、後頭部をそつとさすった。たんこぶ程度ですんでいるようだ。周りの状況が知りたいと、俺は一心不乱に目をこすり、あたりを警戒した。「そう騒ぐな、川島ユウ」

落ち着いた低い声が聞こえた。その方向に目をやると、はっきりしてきた視界に、AKを手に迷彩服を着込んだ男が映っていた。俺は歯をくいしばって立ち上がり、先ほどの襲撃者に敵意を向ける。

「蹴って悪かったな。ゾンビと間違えたんだ。そう怒るな」

俺は男に注意を向けたまま、辺りを見回した。どうやら教室のひとつらしい。朽ちた机やイスがいくつか転がっている。窓際にそのひとつに腰かけている佐藤恵理がいた。知らない金髪の男が、夏らしい格好（アロハシャツにゆるい半ズボン）で黒板に寄りかかってこちらを見ている（睨んでいる？）。

「状況を説明しよう」

勝手に話し始めた男を、俺は遮った。まるで俺が今までの会議に参加していたような口調で話したので、遮るのも少し遅れた。

「おまえは誰だ。ここは避難所じゃないのか」

「俺は自衛隊の橋本信明だ。他の肩書きはどうでもいい。ここは三階で、お前が三十分ほど寝ている間に、俺たちはお前の連れから事情を聞いた。ここは避難所じゃない。少なくとも俺はそんなこと知らなかった。だが、他の――」

不意打ち自衛隊員の説明に、金髪が口を挟んだ。

「おれとそのでぶは、その放送を聞いた」

俺に喧嘩を売ってするような目つきで話した金髪は、ぶつきらばうに俺の後ろを指差した。振り向くと、汗でべとべとのTシャツと、夏だというのにぴちぴちのジーパンを履いた眼鏡の男が、びくつと

俺から目をそらした。

「……」

なにかぶつぶつ言ってるのが聞こえる。両手に美少女フィギュアを赤子をあやすように抱いているのが見えたところで、俺は振り返った。妙なのが集まっている。教室の中央にいた俺は、金髪の挑むような眼光を受けながら、俺のそばでしゃがみこんでいる自衛隊員橋本の話を聞いた。

「ああ。チャラ男が斉藤で、後ろのオタクは菊池だ。紹介遅れてすまん」

橋本は誰に言うともなく謝った。とってつけたような紹介に、俺はそいつらはどうでもいいから他を説明しろと切り捨てた。

「……要点だけ話そう。数日前、ある任を受けていた俺たちのヘリは、襲撃された。校舎の裏側に煙が上がっていただろ。屋上に着陸しようとして、墜落したんだ。『変異体』によってな。見たことがあるか？」

俺は首を横に振った。変異体？

「ゾンビのことか」

「違う。本当に知らないのか。まあいい。」

それで、昨日ようやく本部と連絡が取れた。もうあと1時間もすれば救助が来る。俺にある手土産を期待してな。今はそれを俺は持っていないから、嘘をついた。向こうも余裕がない。持っていないと答えれば救助は来なかったらう」

弁解がましく言う橋本に、俺が目つきだけでその手土産とやらの詳細を尋ねると、

「ワクチンだ」

単調な声で橋本は答えて、仲間全員墜落で死に、救助すべき民間人に協力を乞うことを謝った上で、知っている限りの事件の詳細を話そうとした。

三話 生存者（後書き）

読んでいただきありがとうございましたm（――）m
評価感想待ってます

四話 ワクチン

橋本が口を再び開きかけたその時。ソレは唐突に窓から飛び込んできて、その先にいた佐藤恵理の頭を水風船でも割るように、飛ばした。そしてそのまま、佐藤恵理の体を飛び越えて、トトツ、と教室の床に着地した。

なにが起きたのかわからない俺は、廊下側の壁に当たって跳ね返ってきた佐藤恵理の半壊した頭が、自分の足にコツンとぶつかるのを感じた。口が半開きの、目立った表情のない彼女のパーツ。人の脳みそを初めて見た。いや、それ以外も。彼女の内側にあつたほとんどが、俺の視界に飛び出してきていた。

「尾けられた！ そいつらが連れてきたんだ！ うわああっ」

後ろからのでぶの雄たけびに押されるように、俺は窓から飛び込んできたソレを見る。奇妙な、人間らしいのだが、そうではないような形をしている。

太ももからスネにかけて、腐敗した上半身の一般的な体系と、まるで釣り合っていない。直接空気入れでも差し込んで、限界まで膨らませたような感じだ。バスケットボール並の太さで、いくつもの青色の、それこそ赤ちゃんの腕の太さの血管が浮き彫りになっていた。それに合わせるように足が長くなっている、身の丈は二mを軽く超えていえる。雷のような唸り声を上げるソレと、血しぶきを上げながら椅子から転げ落ちる佐藤恵理の亡骸に全員が圧倒されていた。

「変異体だ！」

橋本の一声と共に、金髪はすぐさまドアから出ようと駆けた。めざとく気づいた変異体が、金髪の方を向いてひざを曲げる。途端に、今まで青かったはずの血管が、紫に変色した。直感でわかる。こいつの足の筋肉は異常だ。地上から10mはあるこの三階の一角に、ジャンプだけでたどり着き、尚且つ人ひとりの頭を吹き飛ばす余裕

まであるやつなのだ。

「うおおおっ」

橋本の雄たけびとともに、AKは連射された。それに呼応するかのように、凄まじい高周波が耳をつんざいた。出所は、変異体のふくらはぎだ。ぱっくりとくるぶし辺りまで縦に割れた肉の奥から、なぜこのような音が出るのか考える暇もなく、思わず耳をふさぐ俺だったが、その際に訪れた心音の世界に、声が木霊した。

佐藤恵理は死んだ。悲しくないの？

ああ、悲しいとも。だって、今まで一緒に生き残って来たから。

俺は答える。耳を塞いただけでは防ぎきれない銃声、叫び、足音。俺はぼんやりと、音のする方に顔を向けている。

残念だけど、俺にはそう見えない。君が佐藤恵理の頭を見下ろした時の表情、どんなだったか覚えてるかい。

いや。

無表情だよ。淡々と彼女を見ていた。いや、彼女というより、人の頭の作りを――

違う。俺は、彼女を見ていた。そして悲しんだ。付き合っていたし――

そう。ちょうど、君が自分の親に襲われる前日に、君は彼女に直接告白した。

そうとも。結婚なんて言葉もでかかったくらいだ。結局言わなかったが、それほど好きだった。いや、愛していた。だから悲しまな

いはずがない。

いや、悲しんでいないね。俺は君の心だもの。なんだってわかるさ。そういうふりをしていただけ。なぜなら、そうしていた方が、彼女とやる時の口実になるから。君は彼女とそうしたいがためだけに、自分を偽ったんだ。人を愛したことなんかないくせに。

違う。違う違う違う。

合っているよ。君は嘘の塊だ。彼女は、君に騙された。だから、こんな状況になってまでも、君を愛し続けた。そして死んだよ。あっけなくね。

やめてくれ。

君、親のことを殺した時、泣いたっけ？

「もう死んでた！！」

俺は叫び、いつの間にか閉じていた瞼を開いた。橋本が汗まみれの顔で俺の腕をつかみ、不思議そうにこちらを見ている。辺りを見渡すと、そこは一階の階段で、下駄箱が見えた。俺と橋本の他には、金髪がいただけだった。

橋本は意識を取り戻した俺を見て、ほっとしているようだ。

「やつは殺した」

聞いてもいないのに橋本は言った。

「でぶは」

俺は無意識に会話を続けようとした。そうしないと、またあいつがやってくるような気がした。

「逃げた」

俺は開け放たれた昇降口を見る。

「もう時間がない。あいつが叫んでくれたおかげで、ゾンビがうじゃうじゃ寄ってくる。ワクチンの回収に向かう」

何を言っているのかわからないところがあつたが、放っておいた。「てめえ足手まといなんだよ。死ねよ」

階段に腰掛けていた金髪が突然言った。俺が見ると、眉毛を釣り上げて、日焼けしたこぶしを握りしめている。

「あ？何見てんだよ。かかってこいよ」
どうでもいい。

「ワクチンは絶対にここにあるのか」

強制された自問自答にシヨックを隠しきれない俺は、会話をする
ことで気を紛らわそうとした。

「ワクチン処理場」

橋本は言いながら階段を降り切った。昇降口に行くかと思つたが、廊下の真ん中で左右を警戒しただけだった。

「全国、いや、全世界に、そう呼ばれる施設があつた」

俺も階段を降りた。

「この世界規模のバイオハザードは、人為的なものである、というのが上の出した結論だ。それを決定づけたのが、極秘裏に手に入れたワクチン処理場のリスト。噂じゃ数千にも及ぶって話だが、具体的な数は知らされていない。この一か所だけを除いてな」

話す声がピリピリと張り詰めている。何を緊張しているんだ？

「すぐにわかる。とにかく、それらの処理場をしらみつぶしにして、わずかでもいい、ワクチンの欠片を見つけないというのが、俺達に課せられた任務だ」

黙って聞いていると、疑問が湧いてくる。

「人為的なものっていうけど、それじゃ世の中をめちゃくちやにした野郎がいるってことか？」

「そうだ。正体はいまだ不明だが、組織であることは間違いない。そいつらがワクチン候補を全滅させたところで、準備は整ったらしい。そのリストが見つかったのも、すでにウィルスが出回った後だ

った」

変な話だな。大体ワクチンって、元となるウイルスがないと作れないだろ。そいつらがわざわざワクチンを作って、それからまた処理したっていうのか？

「ワクチン、というより、免疫というべきか。免疫だったら、お前も、俺も、ここにいる全員が持っている。空気感染しないだろ。これまでの調査で、空気感染しない人間、する人間の割合は、3：7くらいだそうだ。結構生き残る。だが、俺達も感染者との物理的接触には敵わない」

俺は黙った。なんだかんだで、今俺は、この世で一番必要とされている情報を聞かされているのかもしれない。

そして今の解説を聞いて、なにかいやな結論にぶち当たったような気がした。……俺の読みが外れることはなかった。

「その物理的接触にも耐えることのできる先天的免疫者のことを、国、いや世界がワクチンと呼んでいる。ワクチン処理場は、それらの抹殺が行われていた場所だと容易に推測できる」

ワクチンが人間そのものだと言える根拠は？

「確定できる証拠はない。なんせ免疫者の爪の垢も見つかっていないからな。かなり徹底的にやられている。あるとすれば、適当な処理場が調査された時に見つかった、電気——」

一階の教室のドアが一斉に開かれ、言葉はそれに呑み込まれた。すぐ目の前をアフリカの動物たちが駆けていったような、何が起きたか分からないという雰囲気が三人の間に浮遊していると、それぞれのドアから、なにか細長いものが一本ずつ漂ってきた。

「校長室へ行く。そこが入口だ」

橋本はやつと聞こえるほどの声で呟いた。俺は後方から金髪の息をのむ声を聞き、細長いうちの一本を凝視した。

それは、どぶ色に変色した、とてつもなく長く、細い、人の腕だった。

四話 ワクチン（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

ワクチン云々に関してはwikiを流し読み（というより最初だけよんだ）しただけの浅い知識で書いております。

また、それ以外の発想も多分めちゃくちゃなんだろうなと思います
が、そこはフィクションとして許してくれたらと思います。

そいではっ

五話 手（前書き）

夏ホラー企画、8月10日という投稿締切日までの完結に間に合いませんでした。

言い訳はしません。「まだ大丈夫だろう」の野郎の誘惑に負けました。あああ。

企画主催の百物語さん、応援してます。最後まで頑張ってください。
ごめんなさいm（——）m

五話 手

「これを渡しておく」

橋本から渡されたのは、乾いた血のついたハンドガンだった。誰のものかというのは、聞かなかった。

10秒ほどのいい加減な銃のレクチャーを受けた後、AKを構える橋本を先頭に、俺達は向かって右側の通路を進み始めた。

関節のない腕はゆらりと廊下の窓にぺたぺたと手形をつけていたが、俺達の気配を感じた最寄の一つが、その動きを止めた。

「来るぞ。捕まったら終わりだ。一気に駆け抜ける」

橋本の背中が言った。

そして、言葉が終るや否や、動きを止めていた腕が、俺達の方に150キロ越えストレートのボールのように突っ込んできた。

「ひっ」

同じくハンドガンを手に行っていたらしい金髪が闇雲に撃った。当たらない。窓が割れた。

その音に誘われるように廊下の端々まで展開していたどぶ色の腕が、一斉に飛んできた。それぞれが競い合うように、互いをぬめぬめと絡ませながら。

「走れっ」

橋本の射撃は正確だった。ほとんど限界まで引き寄せたところで銃を連射し、最初の一本の血肉を迸らせる。前方に押し寄せる腕の流星群をたった一人で相手にしていた。

俺は言われた通りにした。ドアの前を通り過ぎる時、ちらりとその中を見た。なぜか異様に暗いドアの向こう、俺は確かに教室を埋め尽くすほどの大きさの、鼓動するナニ力を見た。橋本のすぐ裏まで着くと、

「ああああっ」

叫び声。調子が外れているため、誰のの叫び声かわからなかった

が、予想はつく。

金髪が後ろから来た一本に胴体を巻かれていた。

「たすつ助けてっやだっ、おい自衛隊だろなんとかしろっ」

細い腕からは予想もつかない力がかけられているらしく、金髪はそれを解くことができない。その中に金髪に対する愛おしさを垣間見た俺は、銃を固く握りなおす。

「早く来い」

遅れて着いた一本が、金髪のふとももに蛇のように絡みつく。わが子をあやす様に、変色した手のひらでひざの辺りを辺りをなでた。一本、また一本と数は増えていき、とうとう関節ごとに区切られた金髪の部位がすべて巻かれた。金髪が失禁してそれが腕のいくつかを伝ったが、腕は数か月も干ばつが続いていた地域に降り注いだ雨に打たれたように、うれしそうに身を震わせた。そして、金髪はそれぞれの腕に引きこまれ始めた。無論それらはやがて集束することなく、はやくも一番手前の教室の引き戸のところで金髪は背中を反らされるはめになっている。

「あっ、あっ、あっ」

カチカチと、マガジンの空になった金髪の銃が空しく音を奏でる。その様子をつつ立って見ていた俺は、裏から小突かれた。

「早く来い。なにばさっとしてる」

橋本の顔を見て、そのまま前方を見た。ミミズのようにくねらせながら床であがいている腕、一か所に集中砲火をあびてちぎれた腕、すでに引っ込んでいる腕など、ほとんど全滅に近かった。ペンキの入ったバケツをいくつも撒いたかと思わせるほど、血が廊下中に飛び散っている。1-1から1-3までの昇降口を区切りとした右側通路の教室の引き戸からは、いまは何も出てきていない。

橋本の後についていくと、俺は初めて、窓の向こうにも校舎があることに気づいた。

「寄宿舍だ」

1-1の教卓側のドアに銃を突きつけた橋本は、なにもないこと

がわかれると、安堵したように言った。

渡り廊下へ続く曲がり角を通り過ぎ、職員室の前も通り過ぎる。妙な作りをしていると思ったが、廊下の端っこには職員用玄関があり、この場所はフェンスの倒れた場所からは隠れていた。受付まであるようだ。そして、その隣、職員室と玄関に挟まれる形で、校長室と上のプレートに書かれた、凝った趣向が鼻につくドアが佇んでいた。

「おとりか」

俺は玄関の外に見える雑草の目立つ景色を眺めながら言った。肉の引き裂かれる音が後ろから聞こえたので、俺は“驚いた”。

「なにがだ」

ドアには鍵がかけられているらしく、橋本がなにやら細工しているのが見て取れた。

「金髪と俺」

力チャリ。

鍵が開いた。

「ここを突破しようとしたのは、初めてじゃないだろ。お前は前方だけを見て、後ろは気にしなかった。獲物を一つ捕まえたら他は放っておく、つてのは、あの化け物の習性か？」

俺は銃を橋本の後頭部に向ける。橋本は答えず、振り向きざまに銃口の熱くなつたAKを俺の眉間に突きつけた。“俺は迷わず引き金を引いた”が、くじの外れを知らせる力チリという音がしただけで、思っていたことは起こらなかった。

「その通りだ。そして、あの変異体には、もう一つの習性がある」

橋本が空いた手で校長室のドアを開けると同時に、沈黙を保っていた引き戸から、どぶ色の細いものが束になって、開いたドアの面積を目一杯使って飛び出してきた。数百はあるのかという束の先端には、手に混じって人の顔もついていた。

「これから逃げるのは至難の技だったよ！」

橋本は俺に前蹴りを食らわすと、ドアの向こうに消えようとした。

左から迫る死線の中に、自衛隊のキャップをかぶった黄ばんだ顔がいくつか見え、俺はそいつらが橋本の名を弱弱しく呼ぶのを確かに聞いた。ドアの向いの壁にぶつかりむせる俺を、目の前の逃げ道が見捨てようとしている――

橋本の残酷な笑みに空しく助けを伸ばした俺の手を、見えない火に焼かれている左手が掴んだ。

五話 手（後書き）

読んでいただきありがとうございました m () m
感想評価お待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6315e/>

ゴースト・オブ・ザ・デッド

2010年10月14日17時42分発行